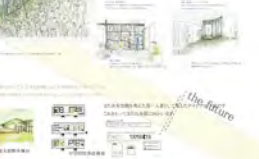
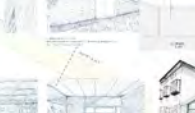


まちが避難解除されて一年
ぼくがまちと関わって半年



the future



まちとのきっかけとなった山木屋学校

山木屋学校とは

山木屋地区の復興に向けて様々な活動をされている
地元の方々と外部の方々の交流を目的とした
体験型学習勉強会であり、農業体験、学習、対話、
地元での食事をしながら、
山木屋を考えるプロジェクトである

自分は9月30日と10月1日に開催された
第6回山木屋学校に参加
参加者は約20名ほどで産総研、東北農業研究所、
大阪大学、広島大学といった様々な外部の人
そして地元の方々であった



保高さん
山木屋学校を企画されている方であり、精力的に山木屋での復興に携わっている
まちに住んでいる方ではなく外部から山木屋に関わる一人である
放射能研究をなさっていたこともあり、原発事故以降山木屋に関わってきた
自分が山木屋と関わっていく上で、山木屋とのつながりを作ってくれた方



農業体験として震災後、東北農研と実証試験に使用していたハ
ウスをイチゴ栽培用のハウスに作り変えるためにイチゴ栽培用ベ
ッドの準備を行った
苗を植える場所の土台は発砲スチロールという自分がイメージし
ていた農業体験ではなかったが、2018年のイチゴの収穫が楽しみ
だった記憶がある



山木屋地区の復興拠点施設としてつくられたとんやの郷
その施設の中には山木屋の素晴らしい写真が飾られてあった
どれも素敵な写真で感動していたが、撮影日は震災前のもの
のしかなく、どこか寂しい気持ちを抱いたのを覚えている



満開のダリア畑でみんなでお花を摘み、横浜から来ていただいた
岡沢先生にご指導いただきながら、みんなで思い思いに作品を作
りた写真だけではなく、山木屋の生産品目であるトルコキキョウも
使いながら花器に作品を作った



山木屋地区の復興拠点施設としてつくられたとんやの郷

その施設の中には山木屋の素晴らしい写真が飾られてあった

どれも素敵な写真で感動していたが、撮影日は震災前のもの

のしかなく、どこか寂しい気持ちを抱いたのを覚えている

満開のダリア畑でみんなでお花を摘み、横浜から来ていただいた

岡沢先生にご指導いただきながら、みんなで思い思いに作品を作

りた写真だけではなく、山木屋の生産品目であるトルコキキョウも

使いながら花器に作品を作った



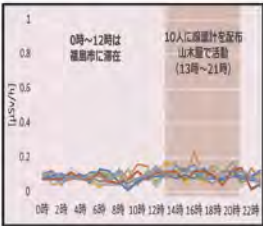
福島県の北東に位置し二本松市や飯舘村と隣接する場所である
東日本大震災被災地かつ福島第一原発事故後、6年もの間避難指示がでていた場所であり
いまだに放射能の影響を受ける地域となっている



まちの無形文化財である山木屋八坂神社三獅子舞はるか昔から地域の五
穀豊穡を願う舞として八坂神社に毎年奉納されてきた
しかし、平成23年3月11日の東日本大震災東京電力福島第一原子力発電所事故
による避難後は、奉納が見送られていた
避難指示解除後初の八坂神社秋季例大祭を迎えた皆さんの想いのもと
山木屋八坂神社三獅子舞が七年ぶりにこのまちに帰ってきた
自分が山木屋に来ていた二日目にその行事があり
実際に舞や住民の思いを感じなにか心に刺さるものがあった



保高さんによる山木屋の放射能学習を受けた
事故前の山木屋、事故後の山木屋について学び、原発事故の被害は地元住民の
身体と心への影響や、環境汚染や大量の除染廃棄物の問題だけではなく、
事故後による伊住民の避難によって
急速に進んだ過疎化の問題などもあることを学んだ



山木屋学校初日に10人の参加者がDシャトル（個人線量計）を携帯し、
活動中の個人被ばくの計測を行った、左はそのグラフである
今回の山木屋での活動（農作業、源勝さん宅、廣野さんの作業場等）での滞在では
極端な数値の上昇は見られなかった

02

まちに飛び込む

何かできるのでは、
何か考えられることがあるのでは、
そんな気持ちでかぼを歩き回り、
山木屋の町にあっては

震災が起こって6年以上も経ったが今でも放射能、復興課題は深刻で、住民の方々が放射能の詳しい情報をすべて知っているわけではなく、専門家や先生に対して住民の方が抱く不安や疑問を一緒になって考え、議論している空間は非常に大切に、建築がこのまちに対してどういう関わり合いをしていけばいいのか、今このまちに建築ができることは何なのか、答えを探すというより、模索する必要があると感じた

芋煮会

10月29日

山木屋学校に参加し、大阪に帰った僕は山木屋のことがずっと頭の片隅にあった。山木屋のことをもっと知りたい、何か考えられることはないかと思い立ち、保高さんに急ではあったが連絡し住民意見交換会の方に参加させていただけることになった。

環境省主催の芋煮会には山木屋住民のほか、千葉大学や福島大学の先生や学生、放射能関連の方がたが20人弱ほどいた。もちろん建築学生は一人だけであり、建築に携わる方はいなかった。

この会では放射線性物質影響コーディネーターの八戸真弓さんによる食品中の放射性セシウムについての講座や、千葉大学の大学院園芸学研究科長 小林達明さんの走行サーベイを用いた里山の空間線量分布の研究の発表が行われた。



芋煮会風景（住民意見交換会）

02

まちに飛び込む

10がすぎるのでは、
10が来るかもしれない
今は風雨をしのぎ、
山木屋の中に入っている。

浪江町 飯館村 富岡町

10月30日/31日

時を同じくして6年ぶりに避難解除になった地域は山木屋以外に三市町村ある

4地域は面積、人口、自然環境、文化など様々な特色、違いがあり

これらの地域を見ておくことは山木屋を考える上で大切なことと思ひ

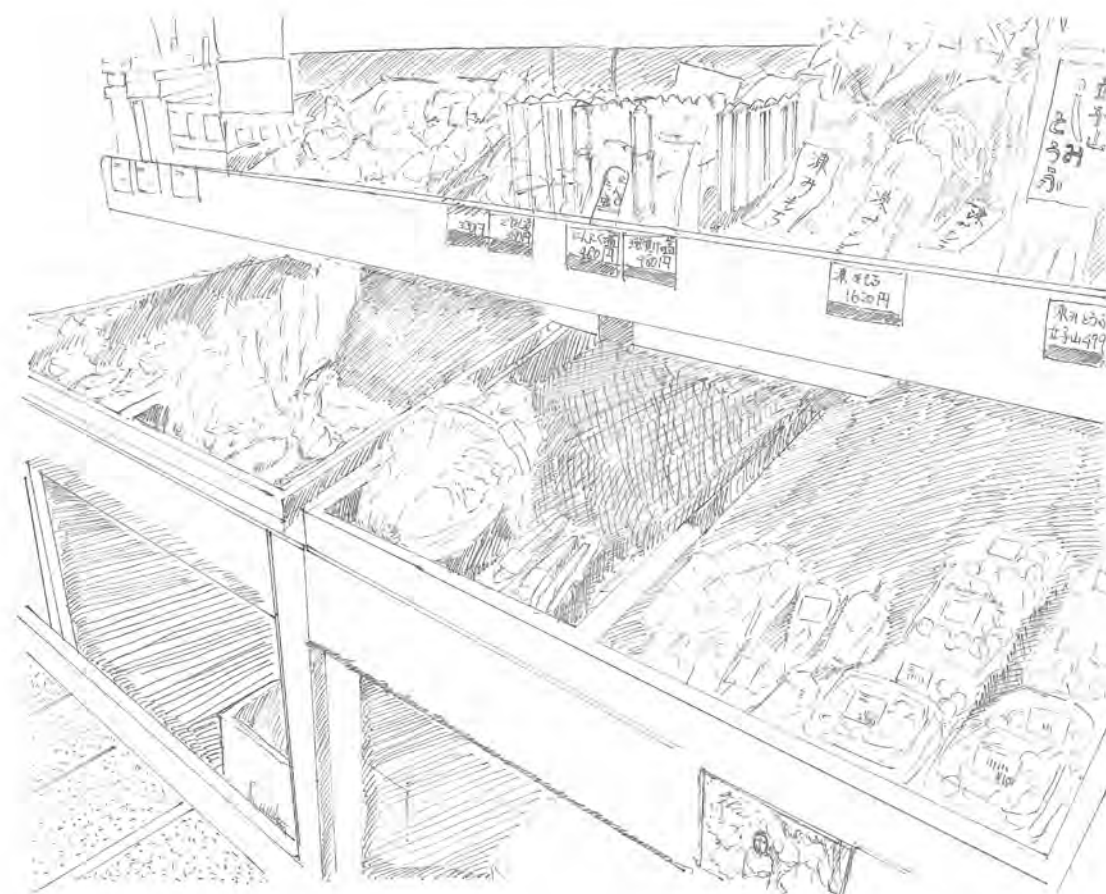
浪江町、飯館村、富岡町の現状を把握しに足を運んだ



飯館村 飯館村は川俣町に隣接し、山木屋地区と深い関わり合いがある地域であり、阿武隈山系北部の高原に開けた豊かな自然に恵まれた美しい村である。やませの影響を受ける地域であったが冷害に強い畜産に力を入れていて飯館牛はブランド牛にもなっている。面積の割には6500人ほどと少ない人口であるが再生可能エネルギーによる「ふるさと飯館村産業創造」といった取り組みを通して飯館村の自立と再生を促す働きに力を入れるなどして復興に力を入れている。

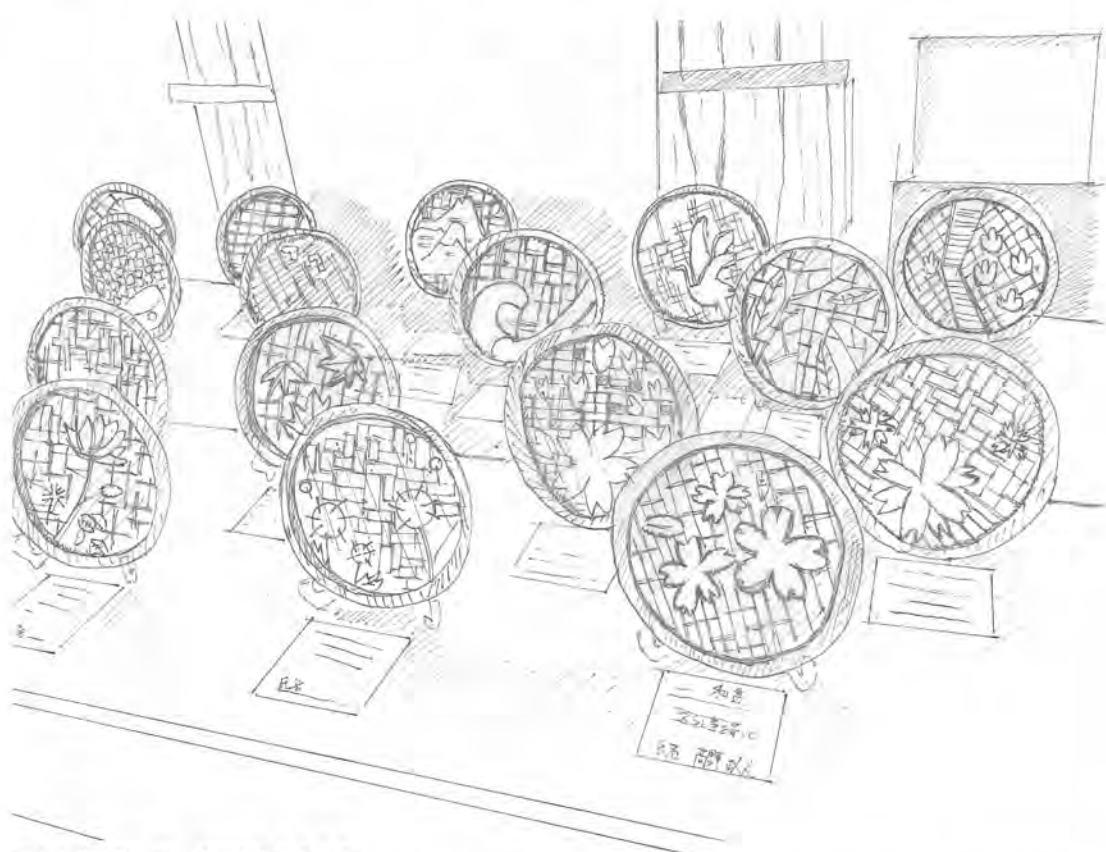
浪江町 浪江町は富岡町と同じく太平洋側に位置し津波被害と原発による放射線被害を受けた地域である。地形的に北西に横長な特徴と放射性物質をのせた内陸への北西の風が吹いたことが相まって、浪江町広域で汚染が広がってしまった。平成25年4月まで警戒区域に指定されるほどの放射線濃度を有した地域であり、一時帰宅なども許可なしにはできなかったことも重なり、今でも6年前の姿が残ったままである。

富岡町 富岡町は太平洋に面し、初期の避難指示区域の10kmにも入っており、町民は地震だけでなく二次的被害である津波・放射線被害を両方受けた被災地の中でも上位の損失を被った町である。住民帰還率も平成28年度で16%と厳しい現状である。



まちの市場

地元福島で採れた新鮮な野菜などを中心に原発による放射能の影響を乗り越えた農家の写真が印象的であった。農業中心の山木屋地区において生業の再開は急務であり、改めて、目に見えない放射能の不安を感じた。



まちから避難している子供たちの作品

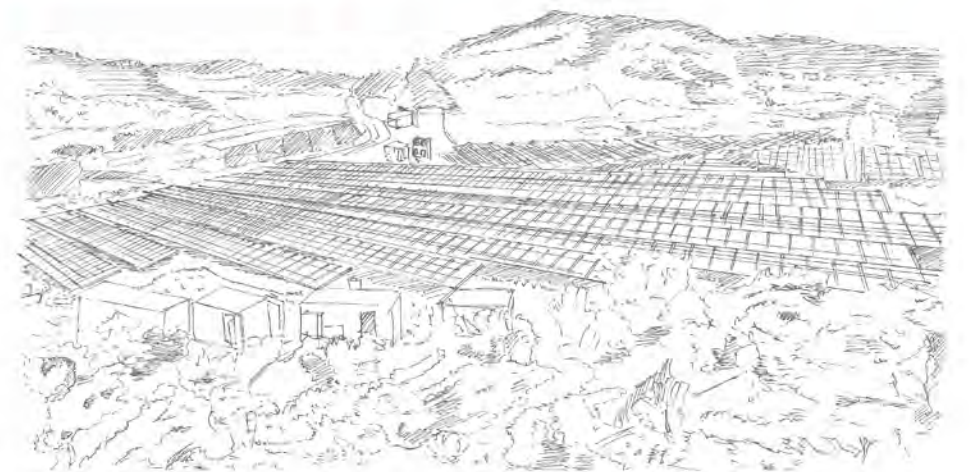
元公民館の場所にできた飯館村交流センターうれ愛館は三年かけ整備され、飯館村の小学生と中学生による美術課題が展示されていた。まちの将来を担っていくはずだった子供たちの避難先での課題ということで、作品にはいろんなバックグラウンドを背負った子供たちの生まれ育ったまちへの想いのようにも感じた。

03

まちを調べる

震災の被災地へ行ってみたい、被災地の現状を知りたい、被災地の復興を支援したい、被災地の未来を想像したい、被災地の未来を想像したい

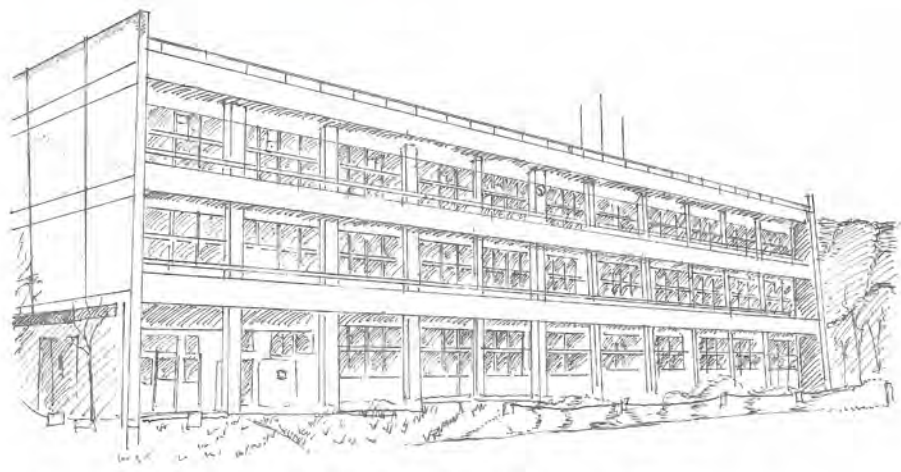
大阪に帰った僕は、山木屋のことをもっと知りたいと思ったし、調べてみたいと思った
とことん山木屋、震災、復興について考察し
農業・商業・文化・工業・教育・放射能・様々な事柄が複雑に重なり合い、一側面からの復興ではなく、多様な試みが必要であり
人と人、まちと人、まちとまち、外部の人の積極的関与など、復興に必要なのではないかとされる事柄が見えてきた



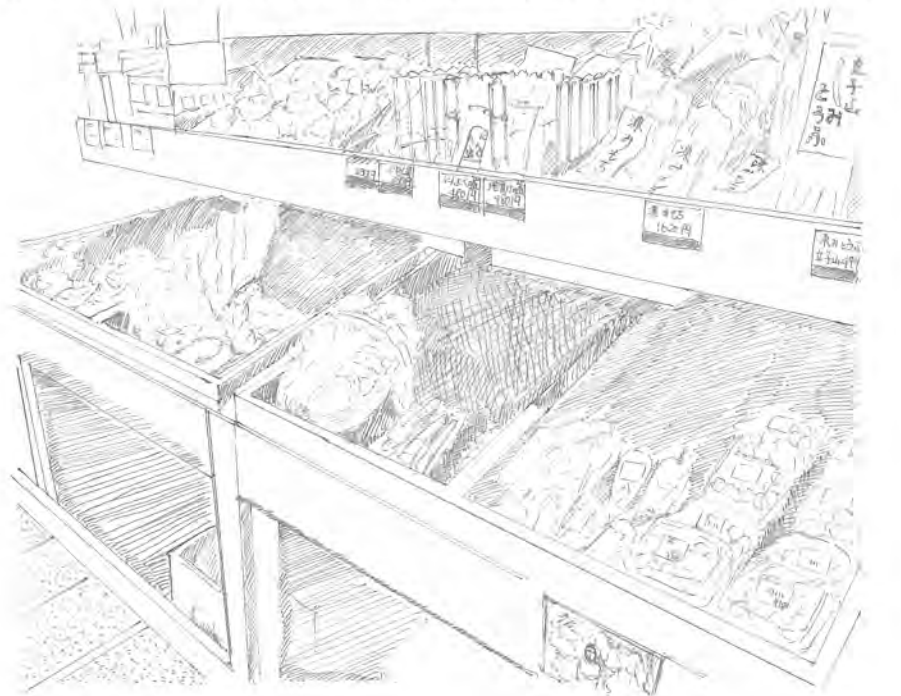
山木屋を車で通っていると美しい自然の中に黒い塊が視線に入ってくる
正体は放射能汚染土が入ったフレコンバッグと復興の為に新しく設置された太陽光パネルである
これら二つの黒は時間の経過とともに風化しつつある震災の新たな姿として山木屋の景色に爪痕を残している



津京電力福島第一原発による避難指示が解除された山木屋地区で、かつて百貨店と評された「まちの何でも屋」であった創業100年の老舗商店「杉田屋」が2017年9月16日にそば亭「語らい処 やまこや」として再開した
ここでは帰還者の食事処であることに加え、ふるさとに帰ってきた人の集まる憩いの場所としての利用も期待される



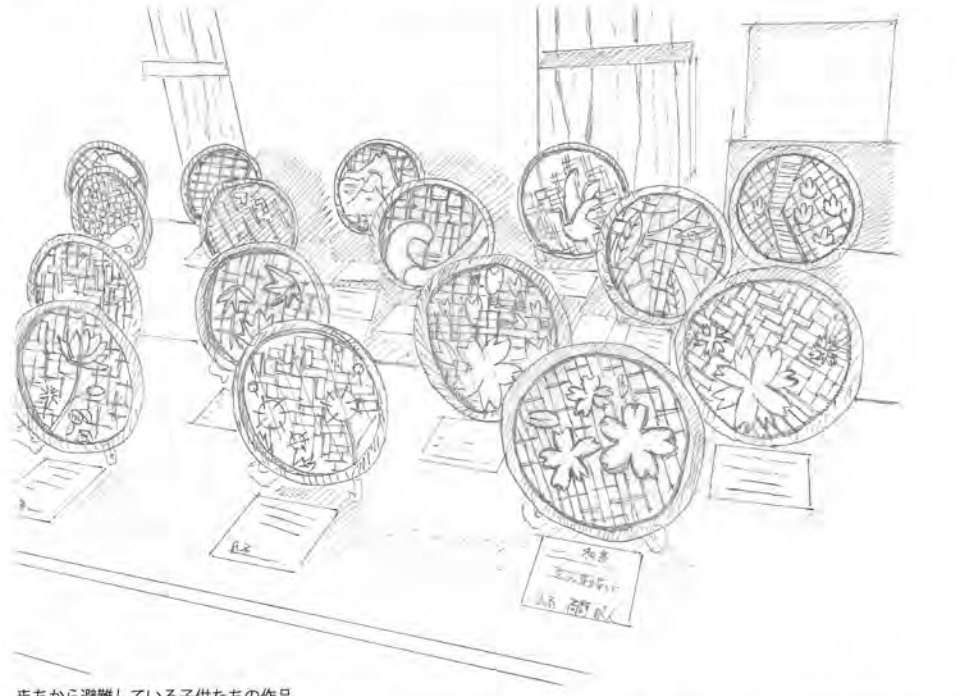
山木屋中学校は山木屋住民みんなが幼少期に通ったまちの記憶の大事な一部である建物である
震災時には復興対策本部が設置されていたしかし避難指示が6年続いたことで、老朽化が進み
隣接していた体育館は取り壊しになってしまった行政はこの校舎の利活用を模索しているが未だに
方向性は決まっていない、この建物の存在はこれからの山木屋の姿を現すものになりうるポテンシャルがあると感じた



まちの市場
地元福島で採れた新鮮な野菜などを中心に原発による放射能の影響を乗り越えた農家の写真が印象的であった
農業中心の山木屋地区において生業の再開は急務であり、改めて、目に見えない放射能の不安を感じた



震災後、山木屋の復興の足掛かりとしてつくられた、復興拠点商業施設である とんやの郷
この建物内には食堂や、コンビニに近いブースがあったりと新たな山木屋の生活を支える施設になっている
しかし、利用者はあまり多くはなく、これからもっと利活用を促進するには、周辺を含めた計画が必要なのではないかと感じた



まちから避難している子供たちの作品
元公民館の場所にできた飯館村交流センターうれ愛館は三年かけ整備され、飯館村の小学生と中学生による美術課題が展示されていた
まちの将来を担っていくはずだった子供たちの避難先での課題ということで
作品にはいろんなバックグラウンドを背負った子供たちの生まれ育ったまちへの想いのようにも感じた

04

まちへの提案

まちと人をつなぐには、まちを元々で居る人々の思いや、
地域のまちに属していることを大切にしたい。

ここ山木屋に今、そしてこれから必要な建築とは何なのか考えてみる必要があった
箱モノの文化施設、交流施設を考え、提案することができる、しかしこのまちには意味がない
復興とは日々変化し答えもなければ、進み方も難しい
その都度まちの為に現状を把握しながら、住民参加の必要性がある
自分が感じた、このまちの可能性、まちのかけがえのないものを見つけ出し、考えていくことの方が重要なように思えた



今回ぼくが提案するもの

山木屋に必要な建築とは？
ただの復興促進建築ではなく
シェアでき、時間軸に捉われないで、
視覚化されるみんなのアイデアの共有空間と
まちにとってかけがえのないものが
共有されるシステムのような空間こそ
このまちの復興には必要で
ただのまちのアイデア箱ではなく、
人と場所、そして想いが重なる空間を
生み出すことによって
持続可能なまちの未来への手助けになるのでは

まちのアイデアとは、例えばまちの良さだったりや改善案
まちに関わる誰もが参加でき、
まちのことを想って出てくるもの
それらは、どれもまちのこれからにとって大切であり
これからのまちの復興の足がかりになりうるもの

まちのかけがえのないものとは
今までまちで大切な活動だった山木屋太鼓や三獅子舞
そして震災後にできた新たなひとのつながり
また数は少ないが帰還した山木屋の子供たち

06-1

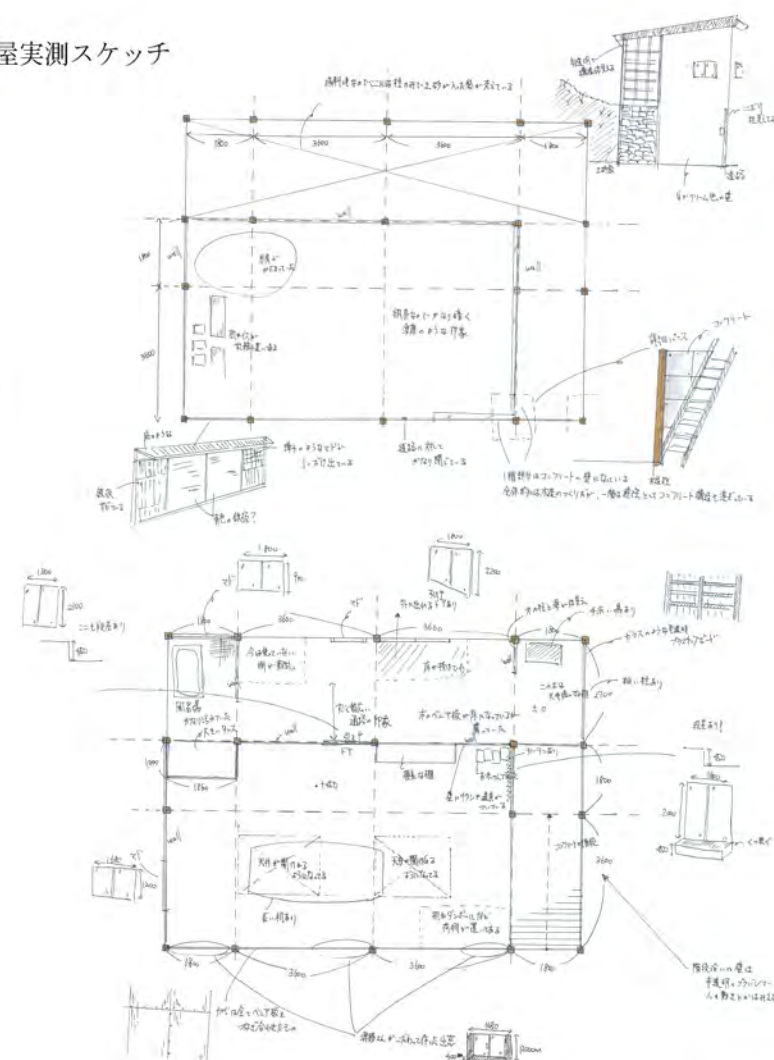
まちと人そして建築

納屋の改修を通して共有空間をつくりだすこと
まちにとってこの場所がどのように使われるのか考える

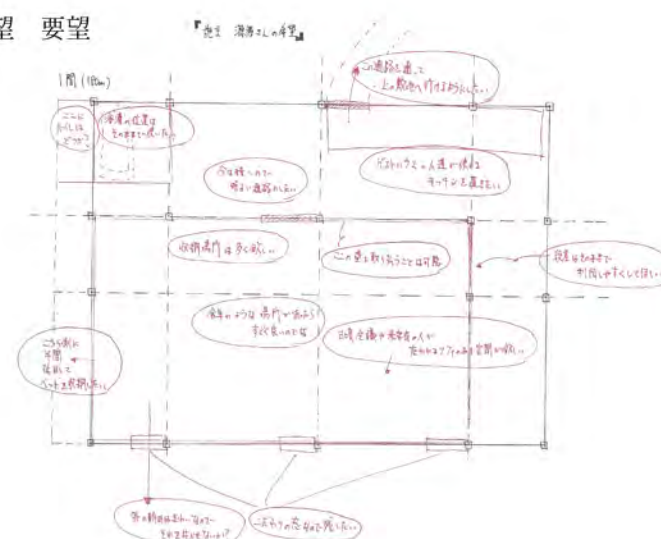
今までの山木屋との関りを通して提案の考え方や捉え方も変わってきた。そして建築がこのまちにできることは何なのかを、考える日々前から、話として出ていた菅野源勝さん宅の別棟と納屋を改修し、今年度中にゲストハウスと寄り合い所にしたいという施主の想い。今回、この2棟の実施案を考え、さらに自分が今まで考え更新してきたまちの復興のための提案。これらを実際に実測や施主の希望を合わせた設計を考える。

- 1 設計案としては実施案として提案する
また、施主自ら改修をするため、建築として可能なものを考える
- 2 設計はあくまで施主の希望や要望に沿うものとする
- 3 施主が震災後に感じた人のつながりや、話し合う場所がなかったこと
この二つの想いに対し建築として解決される提案をする
- 4 自分がまちの人たちと関わってきた経験を踏まえ、
実際に行われている活動が豊かになることを建築を通して目指す
- 5 まちの復興のための提案である、まちのアイデアとかげがえのないものが共有される空間が、
ただのアイデアの棚ではなく豊かな建築空間に寄与するものであること

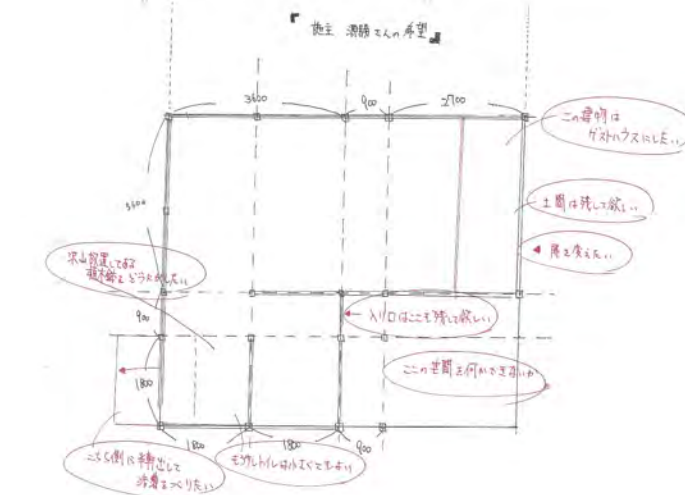
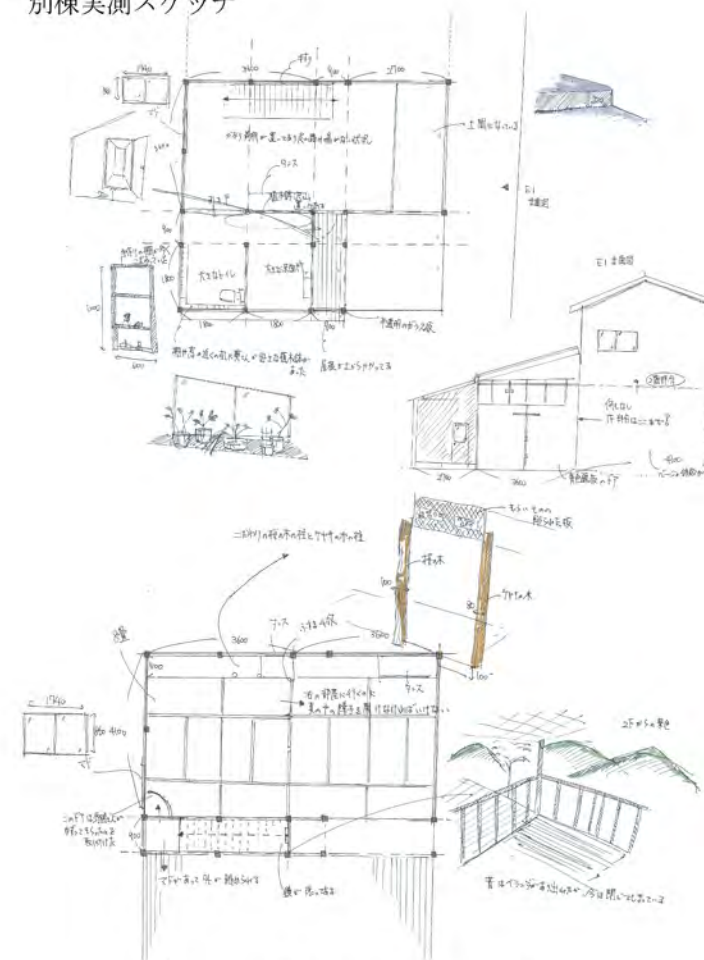
納屋実測スケッチ



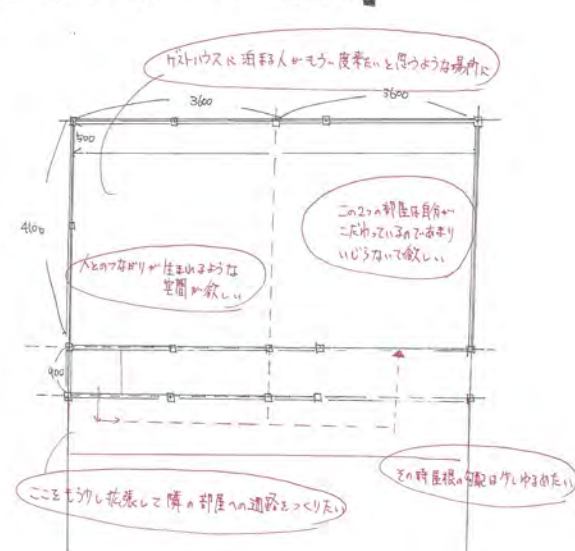
施主の希望 要望



別棟実測スケッチ



施主の希望 要望



06-1

まちと人そして建築

納屋の改修を通して共有空間をつくりだすこと
まちにとってこの場所がどのように使われるのか考える

別棟 階段下スケッチ

別棟の正面の青い入り口を開けると
乱雑に置いてある荷物が目に留まる
避難指示を原因として使われなくなったこの空間は
人の住んでいた空気がなかった
階段下には棚のようなものがあり
ほこりのかぶった荷物がたくさん置いてある
しかし、不思議と正面の窓から暖かい光が差し込み
その一か所に少し落ち着く雰囲気があった

この空間をゲストハウスの人たちの落ち着いて
話したり、本を読んだりするような
特別な空間になるのではないかと感じた



納屋 二階壁面スケッチ

納屋二階の通路と部屋を仕切る
木のベニヤ板の壁
施主の手づくり感が満載な取り付けの棚やダンス
この壁面にふと目が留まったのを覚えている
何かこの仕切っている壁を外したら
この空間はどうなるのだろう

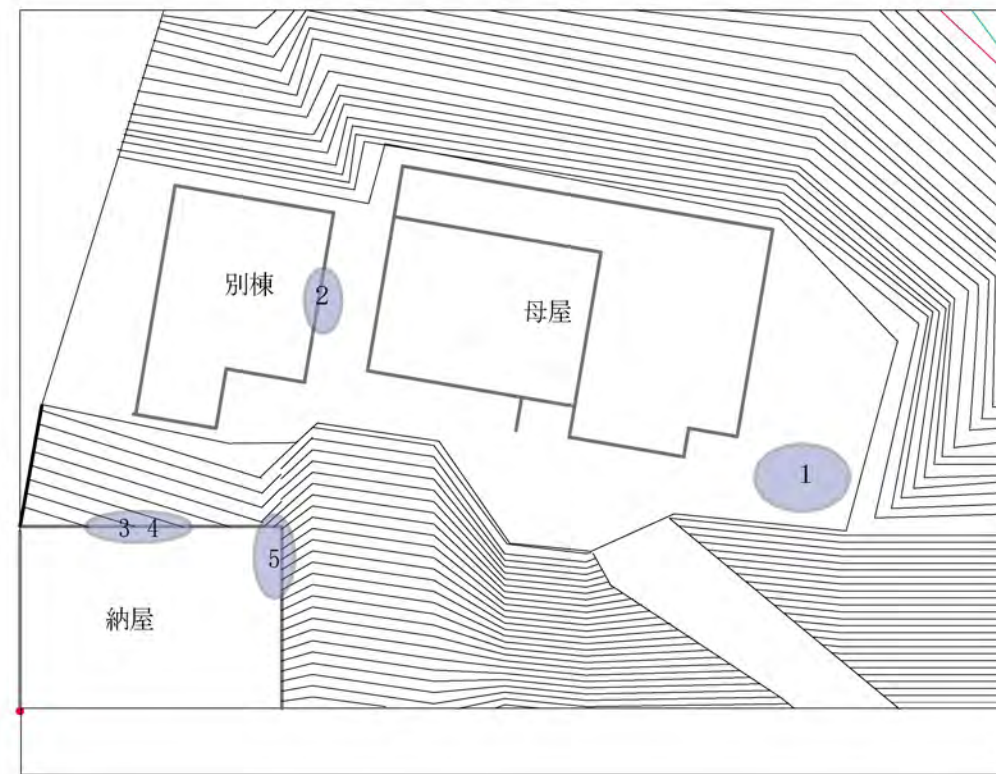
自分の提案してきたものがあつたらどうだろうかと
施主にその場で尋ねた
二つの空間を隔てる壁の向こうには
新たなつながりが生まれそうな気がした



06-2

まちと人そして建築

実測をさしてもらいながら施主の想いを聞く
この空間がもつ性質を読み解いている



1 源勝さん母屋から見える景色である
スケッチから見える場所にはピザ窯をつくりたいという要望があった

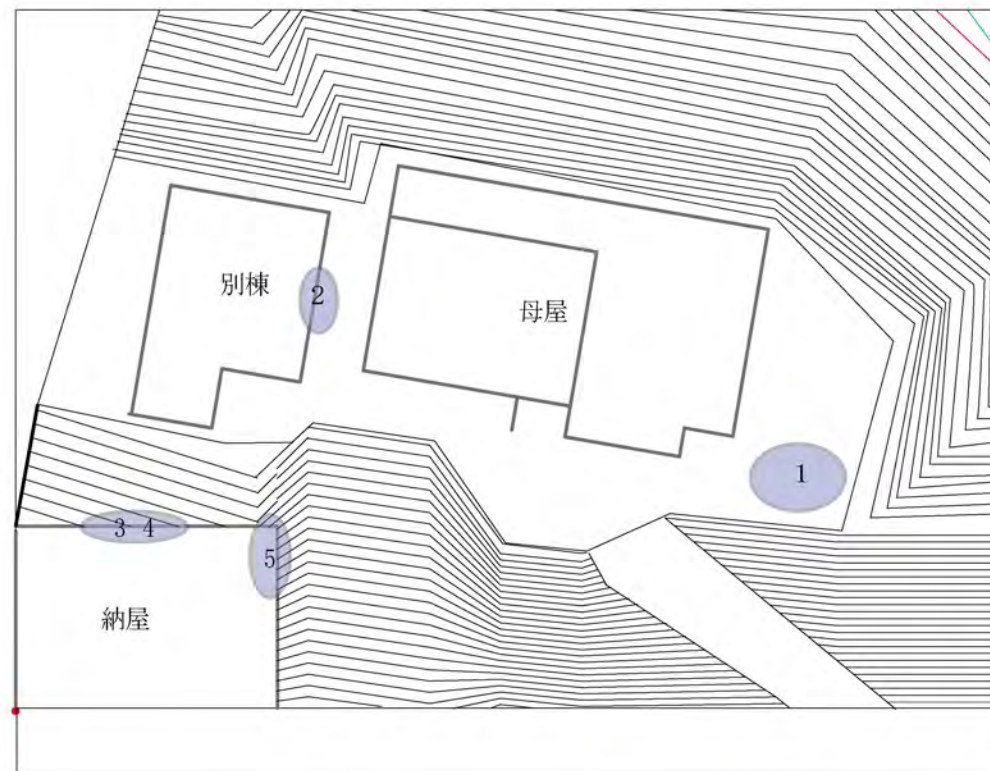


2 一階別棟正面の入り口から入ったところのスケッチ
土間でが作るスラブ差、二階へとつなぐ階段、正面の窓が印象的であった

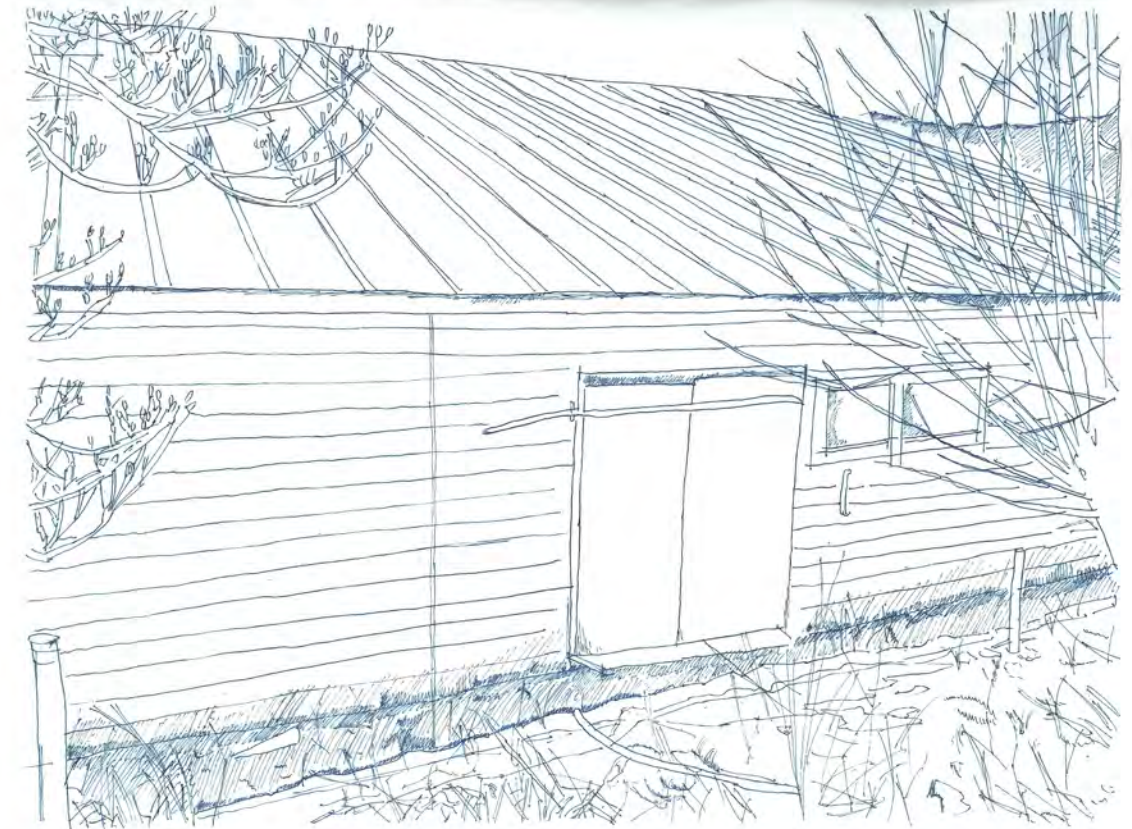
06-2

まちと人そして建築

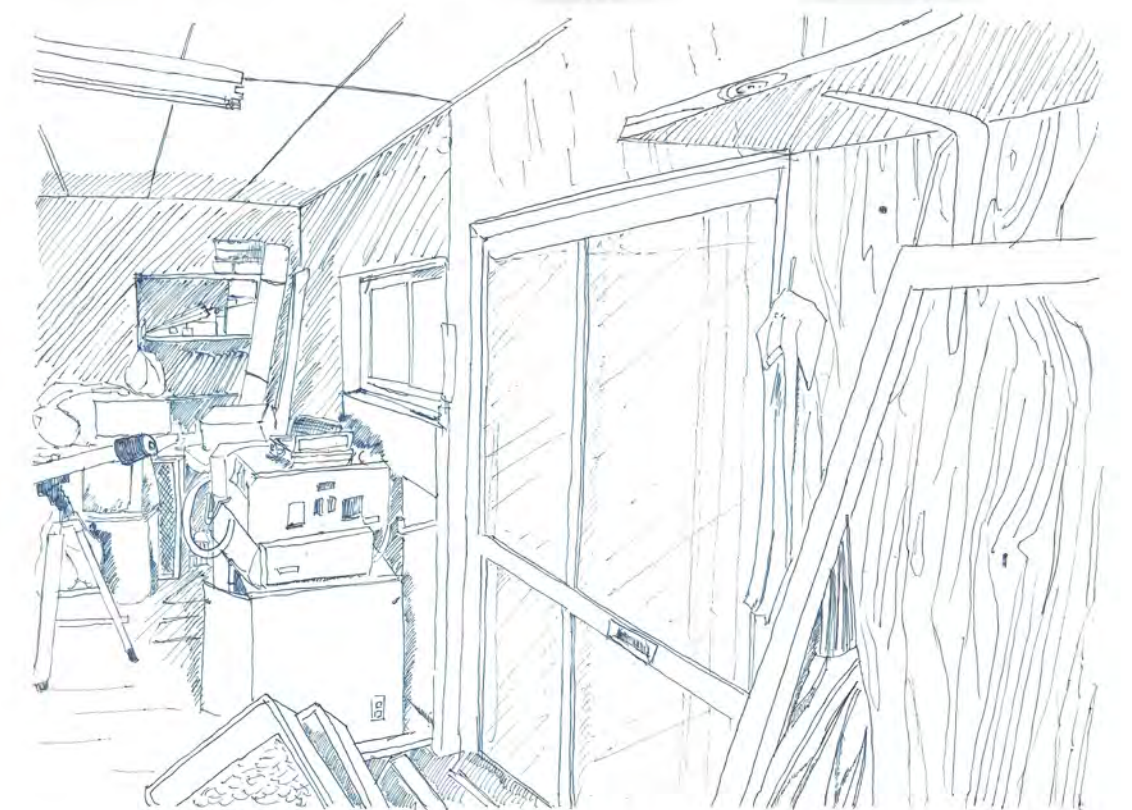
実測をさしてもらいながら施主の想いを聞く
この空間がもつ性質を読み解いている



5 納屋の階段から上に上がるとこの景色がある
右は半透明のプラ板で視線が閉じている
施主の希望であるゲストハウスの場所でもあるこの空間はどうなるのだろうか



3 二階納屋と別棟の間のスケッチである
納屋と高低差のある別棟の間のいは高低差がありこの二棟の建物をつなぐ動線を設計することは
施主、ゲストハウスのためにも必要であると感じた

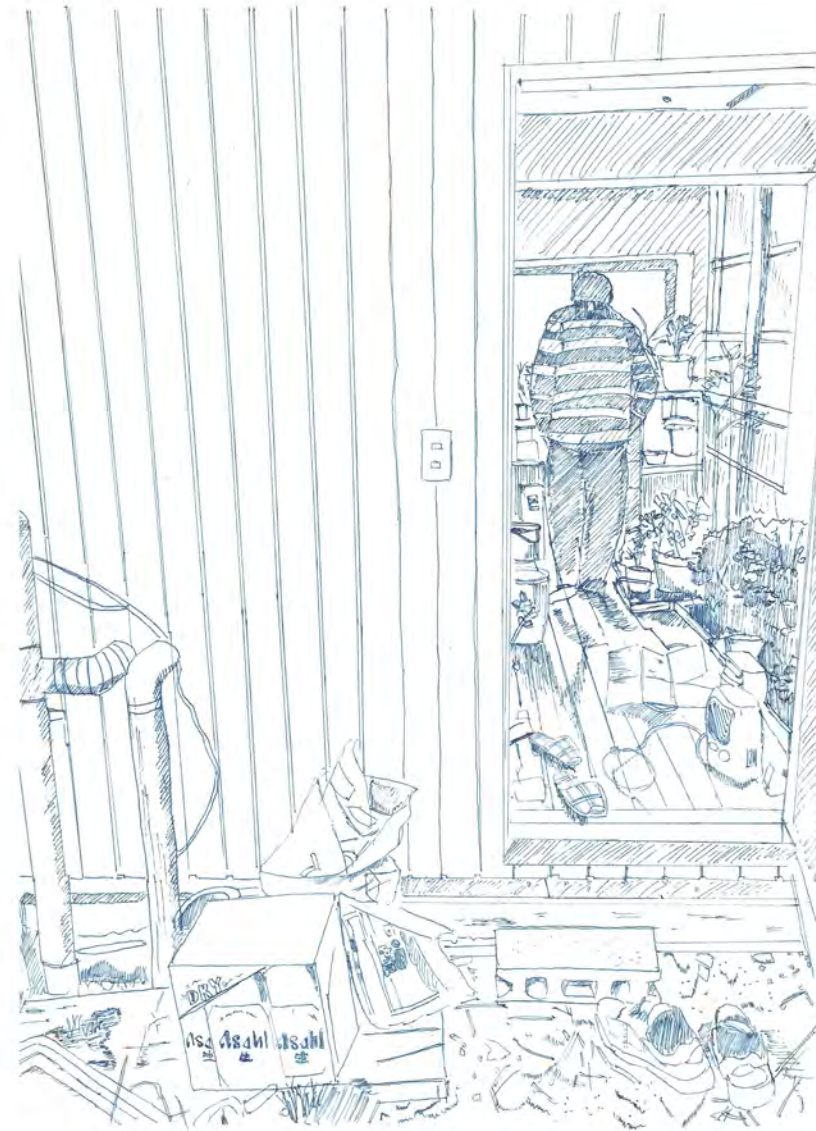
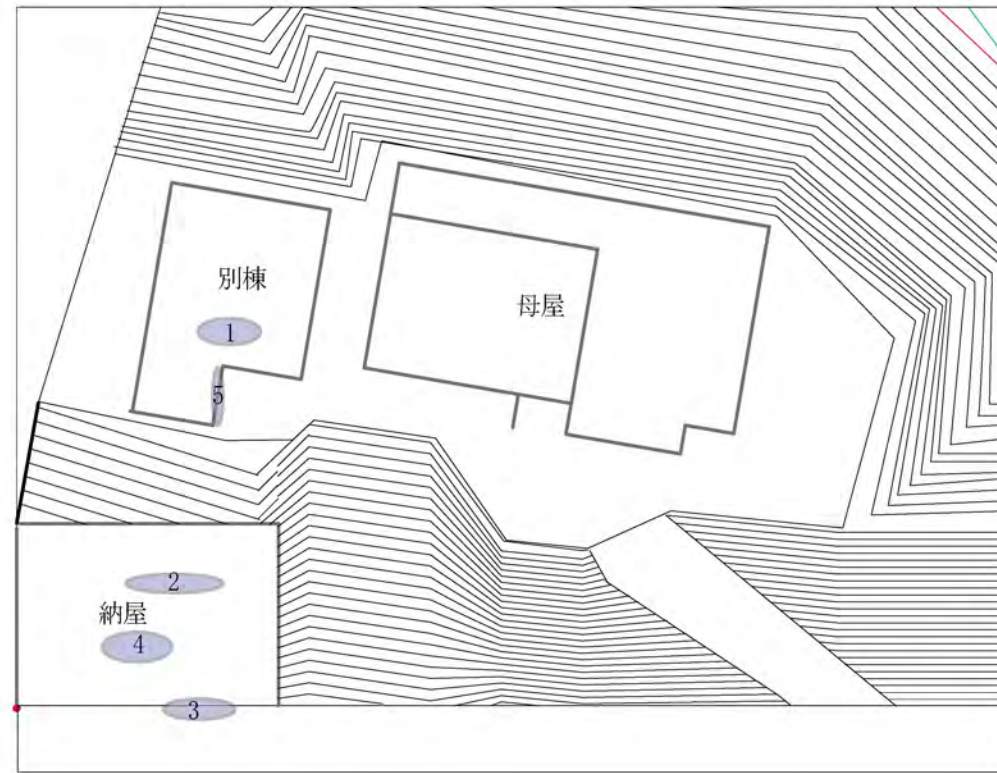


4 二階納屋の通路のスケッチである
見えるドアは左のスケッチの内側である
ゲストハウスからつながる入り口であり設計をこだわる必要がある

06-2

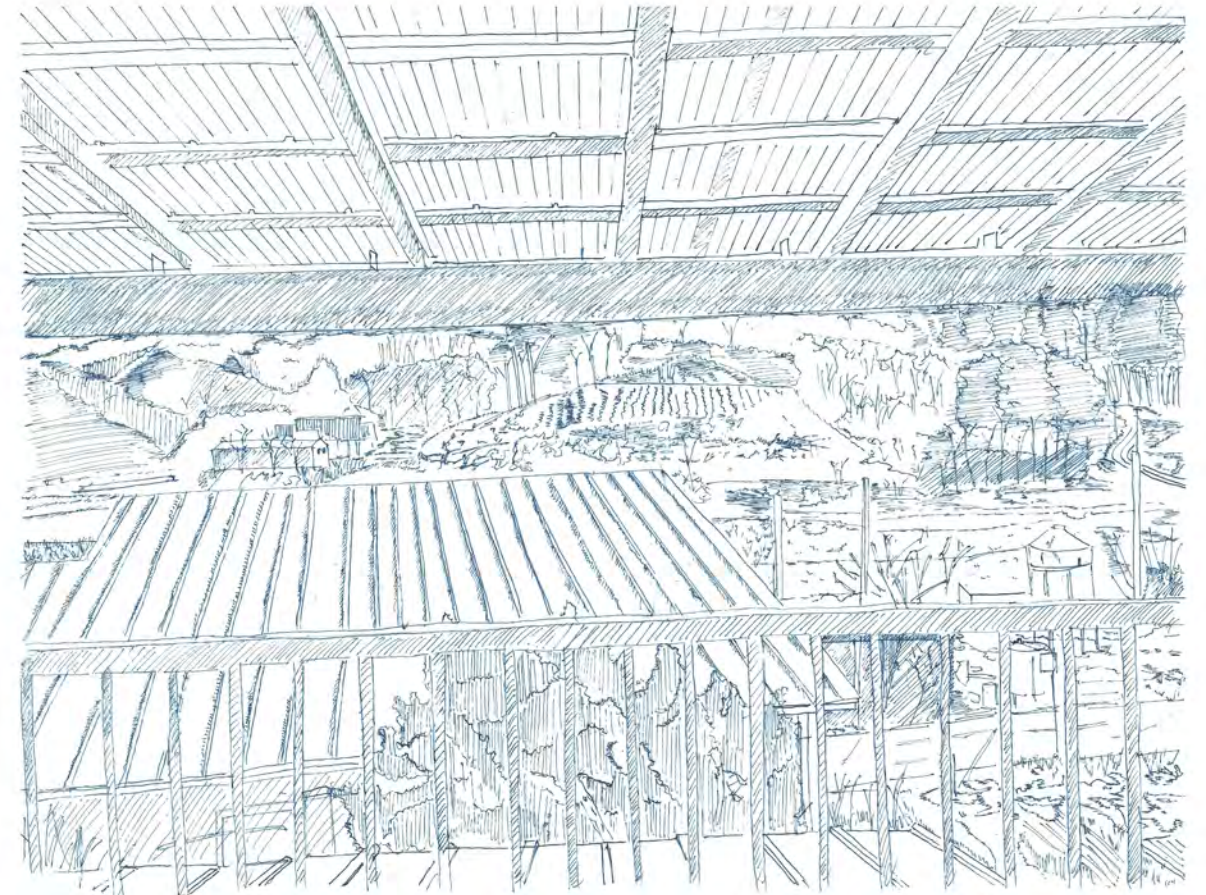
まちと人そして建築

実測をさしてもらいながら施主の想いを聞く
この空間がもつ性質を読み解いていく



5 傾斜手前の別棟入り口

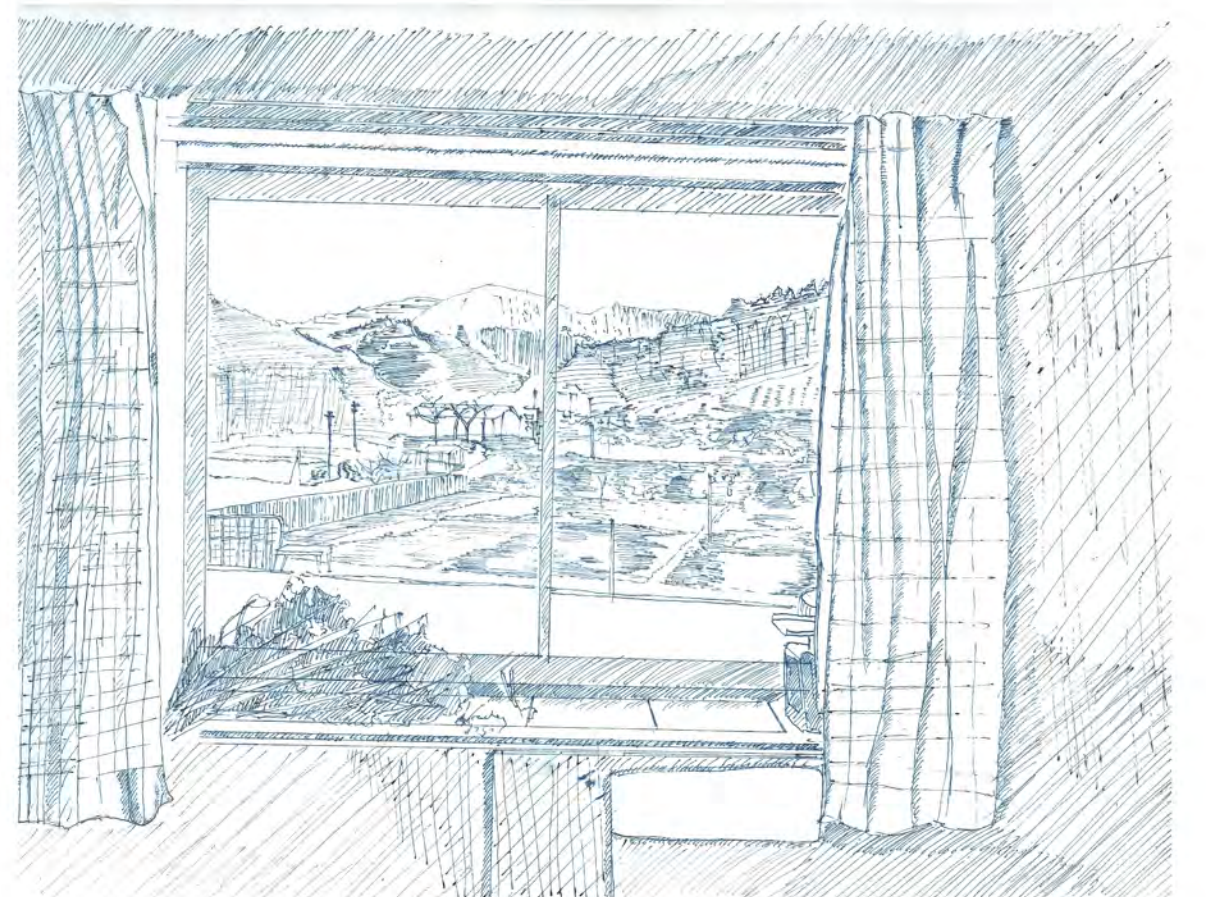
ここも段差があり、室内スケッチに見えるのは、施主の奥さんの趣味である植木鉢であり別棟にはいたるところに置かれていた



1 別棟の階段をのぼり二階の窓から見える山木屋の風景である

豊かな山木屋の自然が広がり

施主との話し合いでもこの前に通路を通し、天体観測などできたらいいねと話していた



4 納屋二階の天井裏

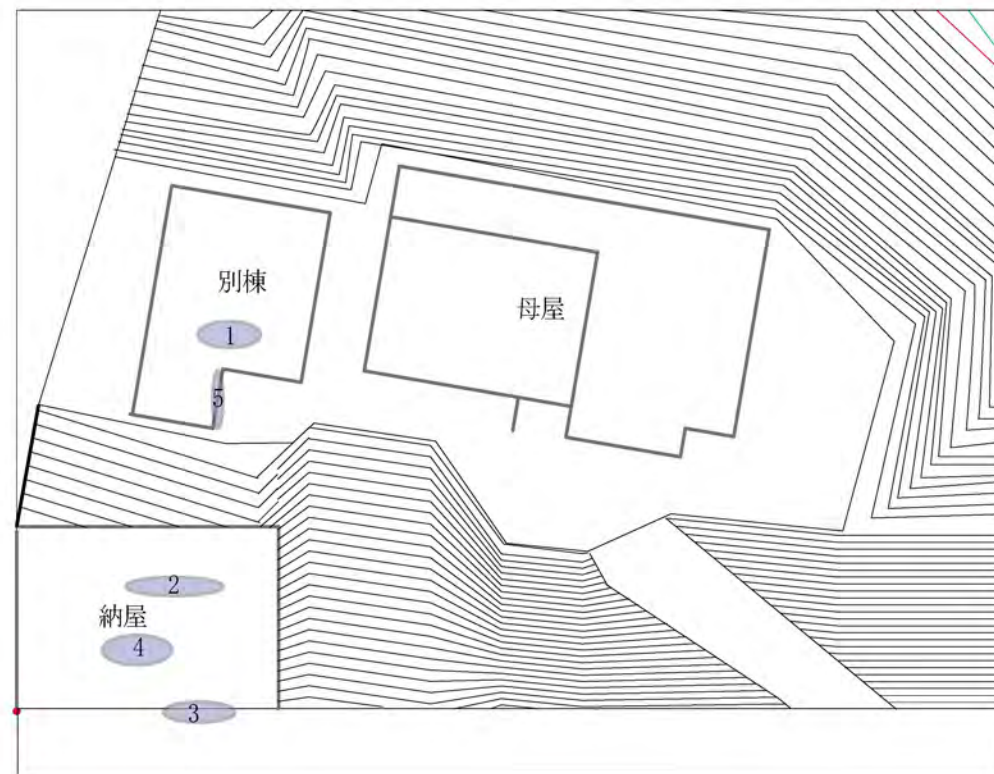
ここも施主がこだわった天窓からの暖かい光が開ける差し込む

施主がこの建物をつくったと聞いたときは木造の骨組みもしっかりしていて驚いた

06-2

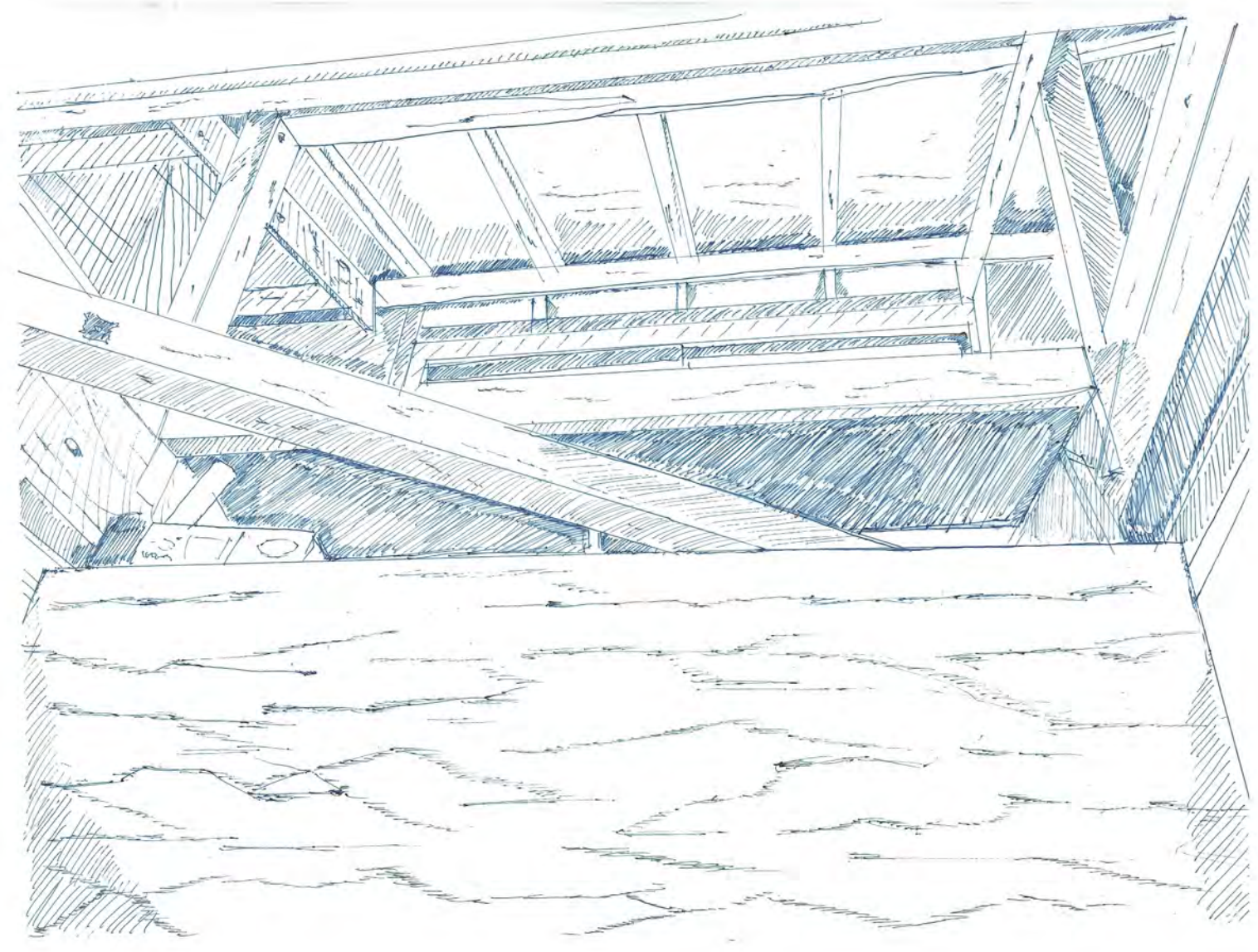
まちと人そして建築

実測をさしでもらいながら施主の想いを聞く
この空間がもつ性質を読み解いていく



2 納屋の二階の通路部分である

施主がキッチンを置きたいとおっしゃっていた場所であり、今回の設計案において特別な意味を持ってくる



3 納屋二階の室内に取り付けてある出窓である

これは施主のこだわりであり、山木屋の景色を切り取る作用もある

寄り合い所とゲストハウス

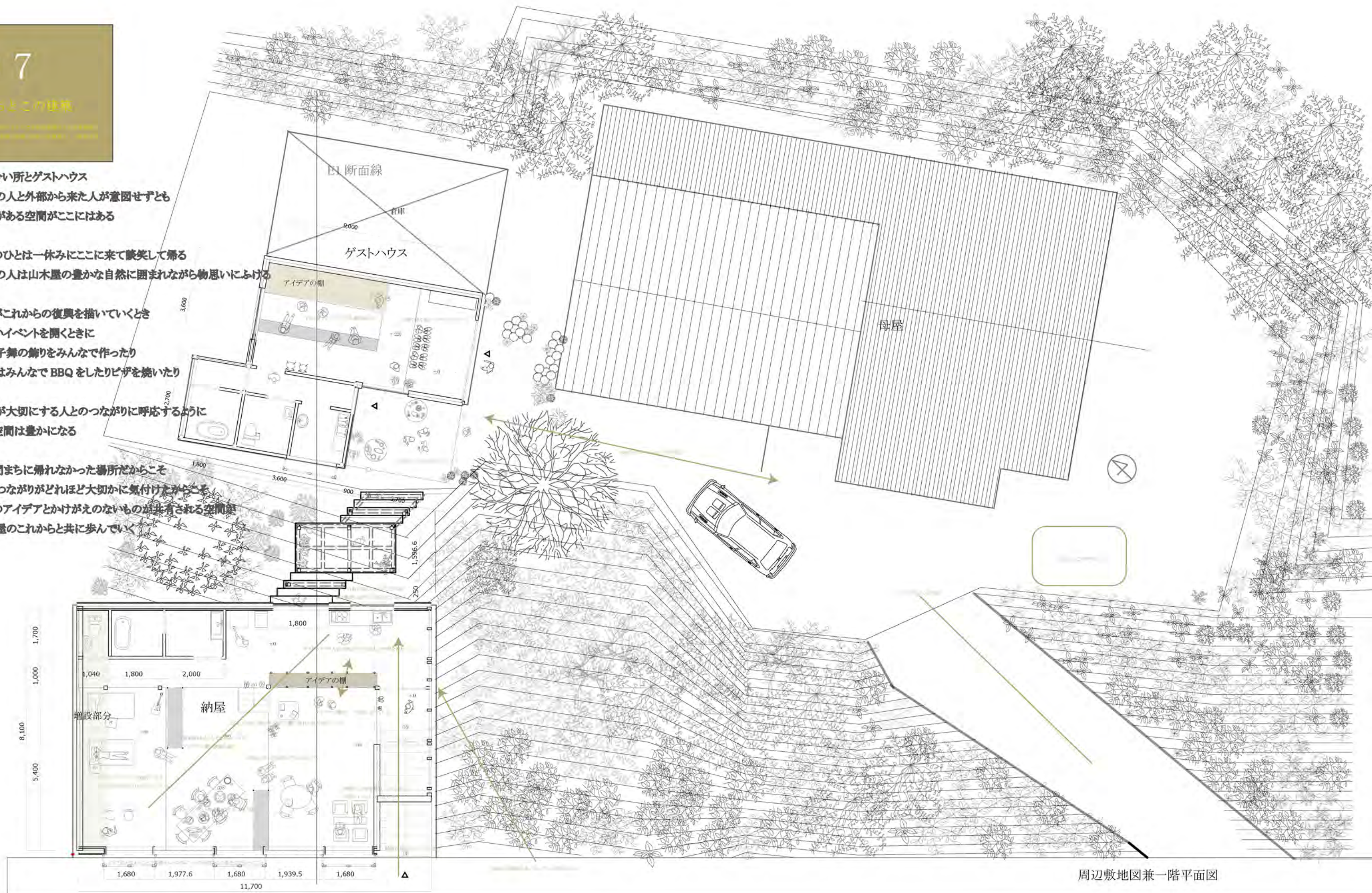
地元の人と外部から来た人が意図せずとも
接点がある空間がここにはある

まちのひとは一休みにここに来て談笑して帰る
外部の人は山木屋の豊かな自然に囲まれながら物思いによける

まちがこれからの復興を描いていくとき
楽しいイベントを開くときに
三獅子舞の飾りをみんなで作ったり
夜にはみんなでBBQをしたりピザを焼いたり

施主が大切に
する人とのつな
がりに呼応する
ようにこの空間
は豊かになる

6年間まちに帰れなかった場所だからこそ
絆やつながりがどれほど大切に気付けたのかも
まちのアイデアとかけがえのないものが共有される空間
山木屋のこれからと共に歩んでいく

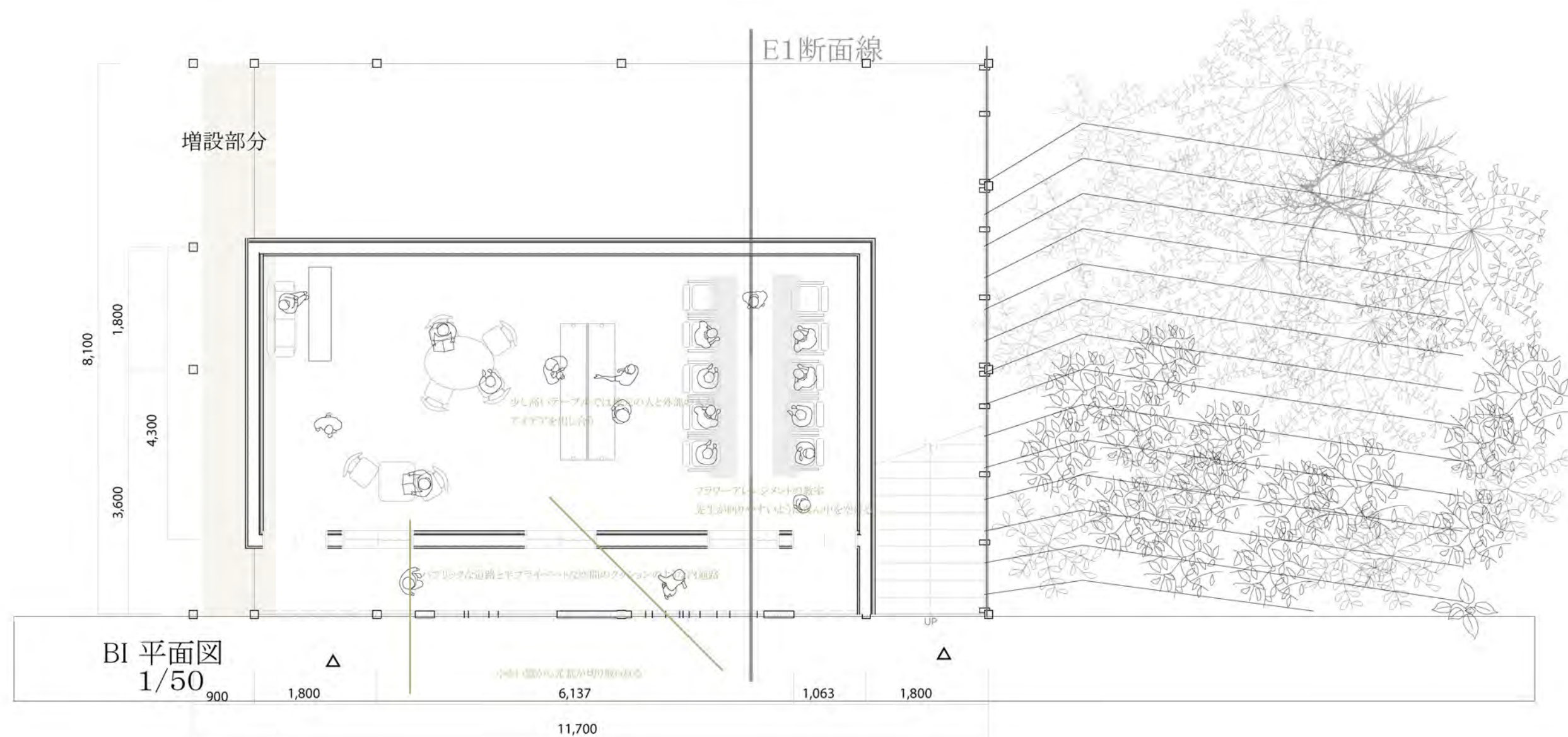


周辺敷地図兼一階平面図

07

まちとこの建築

新建築家とまちの設計がもたらす未来空間
まちのありかたは建築家の思いを基盤として構築する



07

まちとこの建築

新築設計と既存山木屋の設計が繰り返す発着空間
地主は山木屋の復興への想いを建築として発着する



E1 断面図

設計コンセプト

寄り合い所を使う地元の人とゲストハウスに泊まる人が何気ない空間で接点があること
内外の人の活動の風景がつながっていくような設計案を心掛けました
至る所で話すきっかけがあり、何気ない会話から復興やまちの話になる
これからこの場所が山木屋のことを話し合う場にもなり、出会いときっかけが生まれる場所になる

でもみな昔の何もなかった落ち着いた生活が送りたいのかもしれない
ただ、今帰還した人々にとって昔そのままの山木屋は存在しないし、それを求めるのは厳しい現状がある
復興の終わりは誰にも描けない、
建築ができることは、これから起こりうるかもしれない問題の解決策を話し合う場をつくること、かつその場所が仮設に急遽つくられた場所ではなく
日々の生活の中で、人のつながりがちゃんと根付いている場所である必要がある
そんな場所にこのゲストハウスと寄り合い所がなってほしいという願いを込めて設計した

まちとこの建築

複層鉄骨と瓦葺きの設計が施された木造住宅
従来の山手側へ視線への趣きを建築として表現する



外観パース

納屋をガラス面にし中の様子あふれ出てくるように、二つの建物を緩やかにつなぎ視線を上へと導く



ゲストハウス一階 階段下

階段下のスペースに棚を設け、それに面するように内土間をつくる

ゲストハウスの人たちの温かくゆったりとした時間が流れる

まちとこの建築

新編設計とグラフィック設計が繰り返す共同作業
 地主は「山本屋」復興への想いを建築として形にする



納屋二階壁面

この棚はアイデアをしまうただの棚ではなく

奥のキッチンと手前の部屋をつなぎ、活動が一体となった共有空間をつくる

07

まちとこの建築

納屋改修とゲストハウスの設計が織りなす共有空間
地主が「山本邸」復興への思いを建屋として継承する



納屋 道路前

外と中の境界を一つセットバックさせ

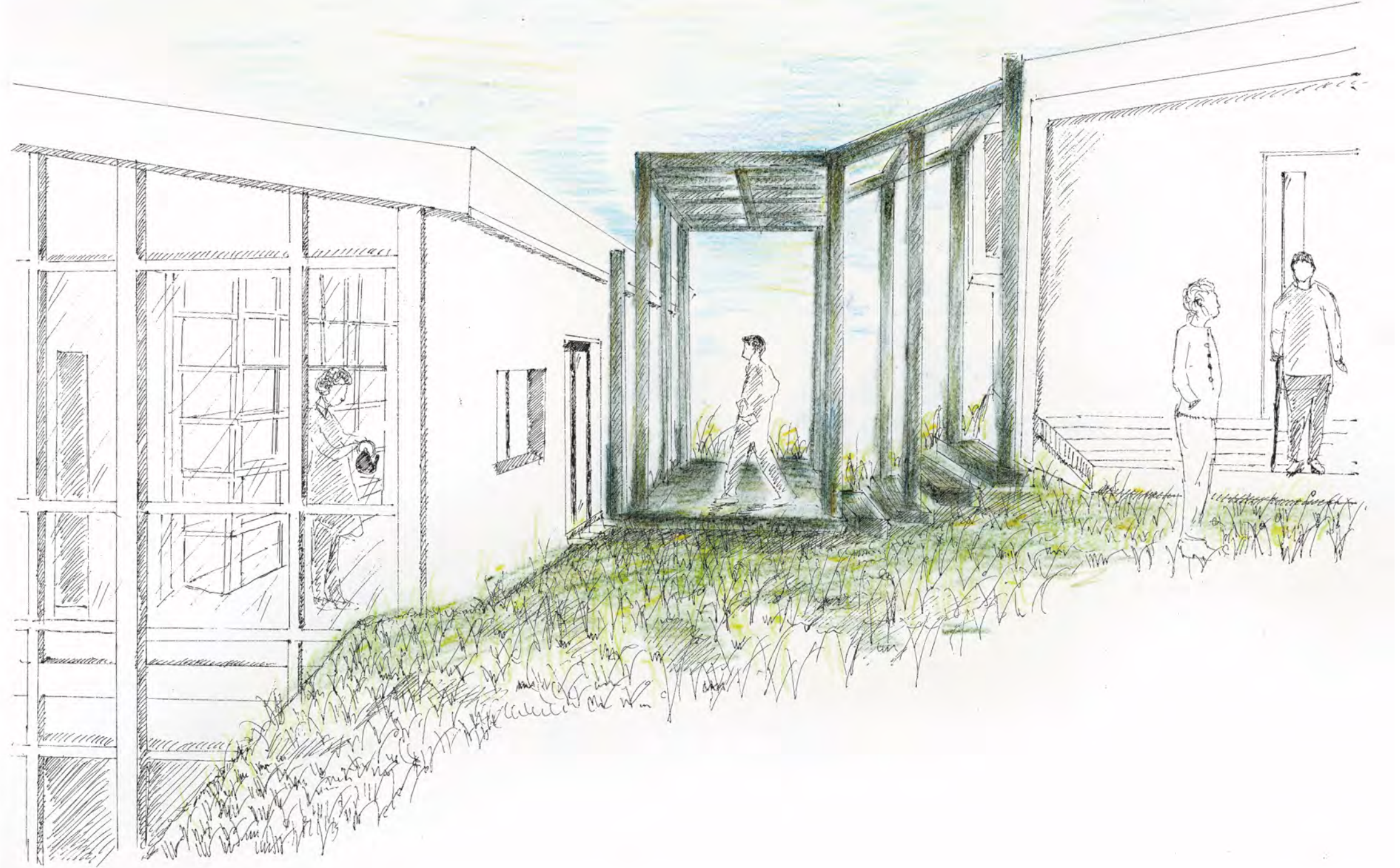
間のスペースをとることでセミパブリックな空間を作ってあげる

外壁は活動風景や明かりをトリミングする

07

まちとこの建築

新築設計と改築設計が繰り返す老若男女
地主が「山本道一」の想いを建築として継承する



二棟をつなぐパーゴラのような通路は二つの空間をつなげ視線を通し
活動を間接的につないでいく

08

まちとのこれから

この設計案を持ってまた山木屋と関わっていくこと
共有空間を考えた第一人者としてアイデアを考えること

この設計案を持って4月また源勝さんと実施設計をすすめていき、
山木屋学校の田植えの方もお手伝いをしに行こうと思っています

また共有空間を考えた第一人者として考えたアイデアの一部です
これをもってまた山木屋に向かいます



山木屋太鼓野外舞台



中学校校舎改築案

ロゴマークデザイン案

これから復興に向けて多くの企画やイベントが開催され、内外部への発信の機会をもっと必要になってくると考えられる
統一のロゴマークはそれらの事柄が山木屋の復興へと同じ目標を持っていることを示す
空白の6年間を取り戻すため、今よりも力強いコミュニティ再生の為に、山木屋オリジナルロゴは一つの象徴へと繋がる

YAMAKIYA

ロゴアイデア①

concept

豊かな自然と山木屋に住む明るい人達
震災による避難指示を受けても尚
繋いできた思いを未来へと託している

EXAMPLE

イベント広告



イベント T-shirts

